

スーダン考古学研究の新動向

—第12回メロエ学国際会議の到達点—

坂本 翼

Archaeology of Sudan in 2016: 12th International Conference for Meroitic Studies and Its Goals

Tsubasa SAKAMOTO

キーワード：スーダン考古学、メロエ学、ヌビア学

Key-words: archaeology of Sudan, Meroitic studies, Nubian studies

I. はじめに

チェコ共和国の首都、プラハ。「百塔のプラハ」と呼び表されることもあるこの街はかつてボヘミア王国の中心地だったらしい。ヨーロッパ列強国の戦火をかわらうじて免れた歴史的建造物はその多くが世界遺産であり、世界一美しい街として例えられることも珍しくない。2016年9月初旬、プラハに降り立った筆者はまさにその魅力の中心にいた。

筆者がここを訪れた理由は他にもない、「第12回メロエ学国際会議（12th International Conference for Meroitic Studies）」へ出席するためである¹⁾。9月5日から9日にかけて国立博物館（Národní Muzeum）で催された本研究集会は（図1）、その名の通りメロエ王国を対象としており、世界20カ国・総勢200名以上の専門家が集い親睦を深め合った。第11回会議（於ウィーン）から実に8年ぶりとなったが、月日の流れを感じさせない盛況ぶりだった



図1 会議開催地

と言えよう。本研究集会をつうじて筆者が感じた知的興奮を書き留めるため、そしてなによりスーダン考古学の到達点を本邦研究者と広く共有すべく、ここにささやかな動向をしたためたい（図2）。

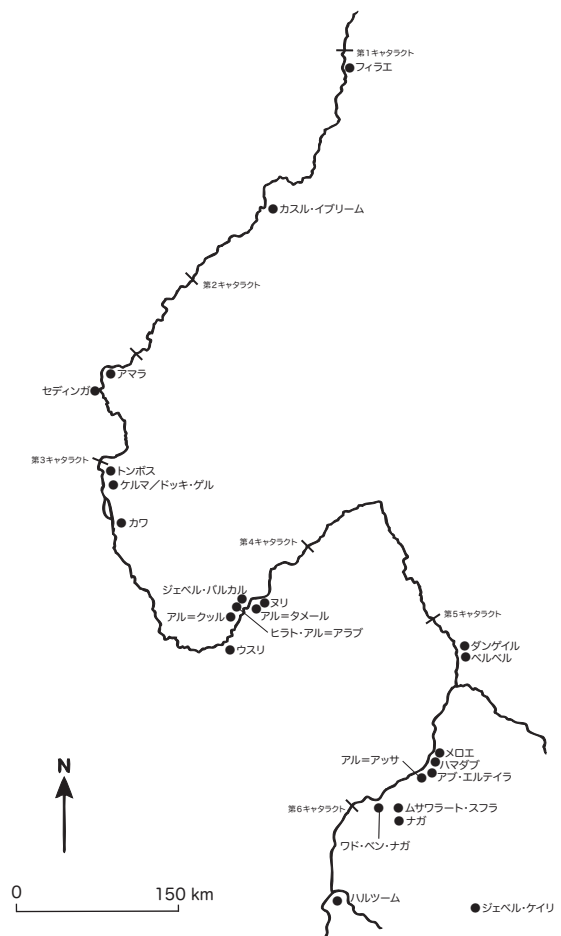


図2 本稿で扱う主要遺跡

II. 第12回会議の経緯・性格

メロエ学国際会議の起源は1971年にさかのぼる。ベルリン・フンボルト大学で初めて企画されて以後 (Hintze ed. 1973)、約4年周期で行われ、世界中の専門家が一堂に会する貴重な場となってきた。これまでの開催地／年については別稿へ譲るとして (坂本 投稿中)、上述したように今年で12回目を迎える。「エジプト学者国際会議 (International Congress of Egyptologists)」が昨年第11回を終えたばかりという点を考慮すれば、いかにその伝統が長く受け継がれてきたかを理解できよう。

しかしなぜ8年も空いたのか。その背景には、昨今中東・北アフリカ地域で生じていた民主化のうねりが深く関係している。いわゆる「アラブの春」である。これにより政情が不安定化し、本来2012年に予定されていた国際会議 (於アスワン) がキャンセルを余儀なくされた結果、約4年周期という流れは事実上途切れたことになる。「アラブの春」がもたらした社会的影響力は本稿の射程外だが、その爪痕がスーダンにも残されていることは強調して然るべきだろう。

細かな議論へ入る前に国別発表人数を挙げておく (表1)。これは必ずしも厳密でないものの、メロエ学の縮図を知るうえで興味深いデータを提供している。まずスーダン出身者が26名と最も多い。その大部分が考古学関係者であることは論をまたないが、ここから、現地人研究者がいかに主要なポジションを占めているかが理解されよう。次がドイツである。アメリカやフランスに大きく溝を開けている点を考慮するならば、本国がやや主導的立場にあると言えるかもしれない。ただしあくまで数字上の話であり、必ずしも学問上の優劣ではないことに留意されたい。また、スイスやオーストリアが欠けている (もしくは相対的に少ない) のもエジプト学と大きく異なる。

次に発表対象遺跡一覧を挙げる (表2)。言い換えれば

これは現時点における調査・研究傾向であり、どのような関心が当該学問を取り巻いているのか推し量る指標となろう。まず目を引くのはメロエ (Meroe) の突出した存在感である。組織的発掘がなされたのは既に百年以上昔だが (Garstang et al. 1911)、現在も変わらず主要発表対象となっている点に鑑みて、いかにその理解が根本的課題となっているかを見て取ることができよう。後述するようにハルツーム大学とロイヤルオンタリオ博物館がアメン神殿域を、ドイツ考古学研究所が「ローマ浴場 (Royal/Roman bath)」を、そしてユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン・カタール校が製鉄遺構群を近年精力的に発掘しており、その全容解明に拍車をかけている。

ジェベル・バルカル (Jebel Barkal) からハマダブ (Hamadab) はいずれも発掘中であり、この意味で上掲表は調査・研究傾向をよく反映している。さらなる傾向については別稿を参照されたいが (坂本 投稿中)、とりわけワド・ベン・ナガ (Wad Ben Naga) は注目されて然るべきだろう。1950年代末に試掘が行われたならば (Vercoutter 1962)、2009年からチェコ国立博物館が本格的調査に乗り出し、王宮跡や宗教建造物 (アメン神殿やイシス神殿) を詳らかにしている (Onderka and Vrtal eds. 2013; Onderka and Vrtal 2014)。本稿の関心においてさらに特筆すべきは、会期中、出土遺物の多くがナールステック博物館 (Náprstkovo Muzeum) に展示されていたことである。土器や石製品はもちろん、近年ではローマ硬貨も見つかっており、メロエ王国と地中海世界の交流関係が徐々に明らかになりつつある。

III. メインセッション

第12回会議は100を上回る研究発表のまとめりである。その全てを詳述することは不可能であるし、また筆者が聴講できなかったものも数多く存在する。したがってここでは幾つかに限定して論じてゆくことにするが、まずもって重要なのはメインセッションであろう。各日午前中に設けられた本基調講演では、第一線研究者の最新成果を通じてメロエ学の今日的課題を広く共有することが意図された。題目は次の通り (表3)。

1. 初日

時系列順に見てゆこう。考古学 (National Corporation for Antiquities and Museums - NCAM) 長官アブデルラハマン (Abdelrahman Ali Mohamed) は、スーダン考古学の最新動向をまとめ開会宣言とした。とりわけリリー (C. Rilly) がメロエ語理解を刷新し続けていること (Rilly 2007, 2010)、またカタール政府の巨額投資 (約150億円) により遺跡調査・保存修復がかつてない規模で進んでいる

表1 国別発表人数 (学会プログラムから算出)

発表人数	参加国
26	スーダン
22	ドイツ
12	アメリカ
10	フランス
9	イタリア
6	イギリス
6	ロシア
6	チェコ
4	ポーランド
2	カナダ
1	他多数

表2 発表対象遺跡 (学会プログラムから算出)

発表回数	対象遺跡
14	メロエ
6	ジェベル・バルカル
5	ナガ
5	ワド・ベン・ナガ
4	アブ・エルテイラ
3	ムサワラート・スフラ
2	アル=クッル
2	カフ
2	ウスリ
2	ダンゲイル
2	ハマダブ
1	他多数

ことが強調された。「カタール・スーダン考古学プロジェクト (Qatar-Sudan Archaeological Project - QSAP)」と冠された本基金は、2012年以降40近い発掘調査隊を支援しており、今後もカタール政府の介入は一定期間続くものと予想される。

続く発表はカワ (Kawa) についてである。すでに M. F. L. マカダムが新王国時代／ナパタ期の宗教活動を詳らかにしているが (Macadam 1949, 1955)、1997年以後、大英博物館学芸員ウェルズビー (D. Welsby) が発掘調査を継続している。ただしその関心は比較的新しい時代に据えられているらしく、新王国時代および第三中間期像を塗り替えるような知見は認められなかった。一方ナパタ期は進展著しい。とりわけ墓域出土供物台は青銅製——したがって明らかに威信財——であり、在地有力者がここに埋葬されていた可能性を示唆している。ならば彼らはいかなる性格を帯びていたのか。本発表はこの疑問を巡るものとなっ

たが、解釈精度を高めるためにも一層の資料蓄積が求められている。

ウェルズビーがボトムアップ型解釈を好むとすれば、エンバーリング (G. Emberling) はトップダウン型解釈を展開する。「記憶 (memory)」を手がかりに物質資料へ迫る発表者によれば、過去とはただの無機質な積み重ねではなく、現在進行形の「いま」から絶えず再解釈／恣意的に操作されうる象徴資源である。L. チュルク (Török) 同様、J. アスマン (Assmann) の理論的業績に依って立つエンバーリングはこうしてクシュ王国へ切り込んでゆく。

ケーススタディとなったのはアル=クルル (el-Kurru) である。第25王朝の起源をめぐる論争ははまだ記憶に新しい (Kendall 1999; Török 1999)。必ずしもその直接的解決に資するわけではないが、エンバーリングによれば埋葬上部構造 (ピラミッド) の多くが後世に拡張されているらしい。これを上記視座から捉える彼は、クシュ王国、とりわけ王墓地という「場」でどのように過去へ接近が図られていたのか考察している。その本格的モデル化は今後を待たざるを得ないが、社会理論外挿によりどこまで歴史像へ肉薄できるかが焦点となろう。

最後に取り上げられたのがジェベル・バルカルである。言わずと知れた一枚岩の麓に新王国時代からメロエ期までの宗教建造物が造営されている。まず新王国時代について述べれば、近年、その岩肌で新たなヒエログリフが発見されたらしい。V. W. ディヴィス (Davies) が目下検討中とのことだが、細かな観察眼が新知見を生み出す好例と言えよう。ただし本題はメロエ期の祠堂 (kiosk) である。B 560 出土遺物がアマナカレケレム (Amanakhareqerem) の王名を含んでいることから、少なくとも紀元後1世紀末まで宗教活動が実践されていた可能性が高い。メロエ王国支配者の多くは謎に包まれているが、その具体像が鮮明になりつつある稀有な王として近年注目を集めている (Sakamoto 2016)。

2. 二日目

翌日はロンド (V. Rondot) とノガラ (G. Nogara) から始まった。彼らが発掘するアル=アッサ (el-Hassa) でもアマナカレケレムの活動痕跡 (羊像) が見つかっており、羊像台座を外周するメロエ文字によればここはかつて「タバカ (Tabakha)」と呼ばれていたらしい。ただしより重要なのは、同じく検出されたアメン神殿がいくつかの建築期に分けられる点であろう。その起源は必ずしも定かでないものの (第一期)、考古学的観察を頼りとすれば紀元後1世紀後半に最初の改築が (第二期)、メロエ末期に更なる改築がなされたという (第三期)。宗教建造物の発展段階特定は極めて稀と言え、それだけに、空間配置や出土遺

表3 第12回会議メインセッション

9月5日 上ヌビアの考古学 開会宣言 (Abdelrahman Ali Mohamed) カワのクシュ王国住居跡と墓域 (D. Welsby) クシュ王の記憶: アル=クルル王墓周辺域の新調査 (G. Emberling) ジェベル・バルカルの祠堂群について (T. Kendall)
9月6日 メロエ王国南部の考古学 メロエ王国における神殿・王宮理念: アル=アッサの考古学調査から (V. Rondot and G. Nogara) ナガのライオン神殿 (K. Kroeper) ナガの形成期 (D. Wildung) ダンゲイルにおける新発見: アメン神殿周辺域の調査成果から (J. R. Anderson et al.) メロエ: アメン神殿北壁の新調査 (Hwida Mohammed Adam and Mohammed Alfatih Hayati) アフ・エルテイラの神殿: 2014年と2015年の発掘成果 (E. Kormysheva)
9月7日 葬送考古学 ナパタ期の葬送建造物とその多様化 (V. Francigny) ナパタ初期埋葬の建築学的特徴 (Murtada Bushara) ジェベル・バルカルの新王墓: 型式学的考察の試み (M. M. Diaz-De-Cerio) ベルベル: メロエ期墓域の最新調査から (Mahmoud Bashir Suliman) カタール・プロジェクト: ピラミッドと王墓の新調査 (A. Riedel, Mahmoud S. Bashir and P. Wolf) 葬送景観における日々: メロエのピラミッドに残されたグラフィティ (C. Kleinitz)
9月8日 碑文と言語 アルネカマニ王のシストラム: メロエ語の起源をめぐって (C. Rilly) 魔除け・神託文書について: カスル・イブリーム出土メロエ文字資料から (J. Hallof) メロエ語における略字記号 (F. Breyer) メロエ語研究史 I: ブルグシュとエアマン (Abdelgadir Mahmoud Abdalla) モノ作りとメロエ王国 (D. N. Edwards) メロエの鉄生産 (J. Humphris)
9月9日 碑文と図像 クシュ王国初期イデオロギーの脱構築: 所謂ピアンキ即位碑の起源をめぐって (A. Lohwasser) ナパタ期王墓埋葬室の壁面装飾 (S. Doll) 「エジプトの」神官になるとはどのようなことか (E. Cruz-Uribe) ナガのアマニシャクト女王 (J. Kuckert) 下ヌビア神殿群の供物場面: 紀元前3世紀後葉フィラエにおけるメロエ王国の活動と「アバトンの神託」の起源をめぐって (J. Yellin) ハマダブとメロエ周辺域 (P. Wolf)

物から新たな歴史的知見をもたらすことが期待されている。とりわけロンドは古代エジプトにも造詣が深い研究者であり、比較的手法を用いて古代スーダンの特質を浮き彫りにしようとしている。

しかし、王名が見つかっていながら何故歴史考察が思うように進まないのか。それは、アル＝アッサのアメン神殿がほぼ失われているからである。対照的にナガ (Naga) のライオン神殿は良く残存しており、碑文や図像資料からの多角的研究が可能となっている。続く二人の発表はいずれもそのようなものである。

ナガはメロエ語で「トルクテ (Tolkte)」と呼ばれた。C. R. レプシウス (Lepsius) の学術調査を除けば、その本格的な研究が始まったのは1978年と極めて遅い。1980年代にはチュービンゲン大学がライオン神殿の碑文／レリーフを出版している (Gamer-Wallert 1983; Zibelius 1983)。1995年からはベルリン・エジプト博物館が、より近年ではミュンヘン州立エジプト美術博物館が調査を継続している。なお王名としては、紀元前2世紀末に即位したとされるシャナクダケテ (Shanakdakhete)、紀元後1世紀のナタカマニ (Natakamani) とアマニトレ (Amanitore)、さらに上述アマナカレケレムが確認されている (Kröper et al. 2011)。ナガとメロエ王家の強いつながりを理解できよう。

一方ヴィルドゥング (D. Wildung) は、ナガの古代名がメロエ期以前から認められることを指摘した。とりわけナスターセン (Nastasen) ——ナパタ期後葉の支配者——が言及しているらしく (筆者未確認)、すでにこの頃から居住活動が始まっていた可能性が高い。ただし問題は、上記証言を裏付ける考古学的痕跡がまだ見つかっていないことである。今後問われるべき一つの課題が浮き彫りになっている。

続いてアンダーソン (J. R. Anderson) が登壇した。2000年に始まったダンゲイル (Dangeil) 発掘は実に16年目を迎える。当遺跡を論じる上で触れておかなければならないのは、アメン神殿南東部で2008年に発見されたカシュ (cache) である。紀元前7世紀から5世紀初頭を生きた支配者三人 (タハルカ (Taharqo)、センカマニスケン (Senkamanisken)、アスペルタ (Aspelta)) の彫像群が粉々に砕かれた状態で埋納されていたことから、故意に破壊されたことを疑う余地はない (Anderson and Salah eldin Mohamed Ahmed 2009)。では何が起きたのか。ジェベル・バルカルとドッキ・ゲル (Dokki Gel) にも似たようなカシュがあることから、これらが共通史実を指し示している可能性は高いもののその特定は困難を極める。ダンゲイルは当時どのような社会的状況に置かれていたのか、そしてメロエ期居住集団はその過去——おそらく忌む

べき出来事——をどのようにアメン神殿へ組み込んだのか。さらなる熟考が望まれている。

ここでようやくスーダン人の出番となる。メインスピーカーとして招待されたホワイダ (Hwida Mohammed Adam) はハルツーム大学准教授を勤めており、またメロエのアメン神殿域再調査を手がける若き研究者でもある。とりわけ聴衆を惹き付けたのはヒエログリフ入り供物台が出土したことである。メロエで新碑文発見とあれば大きな事件だが、その詳細は写真を含めて一切提示されなかった。続報を待ちたい。

同じく近年脚光を浴びたのがアブ・エルテイラ (Abu Erteila) である。コルミシェヴァ (E. Kormysheva) と E. ファントウサティ (Fantusati) 率いるロシア＝イタリア合同調査隊は、2015年末、アメン神殿域でメロエ文字入り玄武岩石材——聖船を安置する台座——を発見している。高さにして約120 cm。四面に配されたヌウト女神が総じて一般的図像表現ならば、驚くべきはその傍にショラカロール (Shorakaror) と刻まれていることである。なぜなら本支配者は、これまでアマラ (Amara) とジェベル・ケイリ (Jebel Qeili) でしか確認されていなかったからである (Eide et al. 1998: 908)。血縁的にはナタカマニとアマニトレの息子かつ後継者と考えられているが、上記言及に鑑みて、本支配者がアブ・エルテイラと深く関わっている可能性が極めて高い。歴史像はここでも塗り替えられ始めている。

3. 三日月

本日のメインセッションは葬送領域へ捧げられた。口火を切ったフランシグニー (V. Francigny) は仏考古学研究所 (Section française de la direction des antiquités du Soudan - SFDAS) の若きディレクターである。メロエ期に対しナパタ期の墓域は驚くほど少ないが、その足かせを物ともせず、当該期葬制の全体像を浮き彫りにした。とりわけ焦点となったのは第三中間期からナパタ期にかけての社会変化である。すでにトンボス (Tombos) でスミス (S. T. Smith) が、ヒラト・アル＝アラブ (Hillat el-Arab) でヴィンセンテッリ (I. Vincentelli) が考古学的検討を重ねているが (Vincentelli 2006; Smith and Buzon 2014)、フランシグニーもまたセディング (Sedeinga) からアプローチを試みる。上記研究者の総意として近年定着し始めているのは、第三中間期とナパタ期の揺るぎない連続性であり、したがってこれを断絶としてきた既往研究への根本的疑義である。換言するならばもはや問われるべきは暗黒期の有無ではなく、第25王朝形成へ向かう大局の流れの中で移行期を捉え直すことだろう。当該期を特徴付けるエジプトとスーダンの弁証法的止揚を紐解くためには、社会

変化を見透す理論的視座が欠かせない。

フランシグニーがマクロな視点を提示したならば、続くブシャラ (M. Bushara) はミクロな議論を展開した。アル＝タメール (el-Tameer) でナパタ期埋葬を検出した彼によれば、その下部構造は少なくとも四部屋から構成されているという。なんと全長 12 m にも及ぶ。これはアル＝クッルヤヌリ (Nuri) に匹敵する大きさであり、言葉を換えれば、被葬者がクシュ王家となんらかの関わりにあった可能性が高い。ブシャラはここから王朝対立を敷衍しようとしている。前世紀初頭より幾度となく唱えられてきた仮説だが、新資料から解釈を一步推し進めていると言えよう。

ディアス・デ・セリオ (M. M. Díaz-De-Cerio) はもう一つの王墓地ジェベル・バルカルを扱った。1995 年よりスペイン隊が断続的調査を行っているが (Berenguer Soto 2001)、特筆すべきは、レイズナー以後約 100 年ぶりに新たな埋葬が見つかったことである。その被葬者特定はまだ時期尚早と言わざるを得ないものの、発表では、検出されたピラミッドの型式学的年代観が議論された。導き出された結論——紀元前 4 世紀前後——の是非はさておき、本発見はクシュ王朝史を根本から左右し得るため軽視できない。

続くバシール (M. S. Bashir) は欠席したため省略する。これを例外とすれば、リーデル (A. Riedel) はメロエのピラミッドについて発表した。彼女の主張は二点。まず王墓 Beg.S.503 の再発掘である。レイズナーが取り損ねた考古学的／建築学的／図像学的情報の記録はもちろんだが、さらに、埋葬室出土炭化物から 10 点の放射性炭素年代が得られたという。残念ながら詳細は告げられなかったものの、王墓編年構築への確かな布石となることは間違いない。次にサイトマネジメントである。その取り組みはまだ試行錯誤段階だが、周囲に防風堤を設けることでピラミッドの風食を最小限に食い止めようとしているようである。

一方クライニッツ (C. Kleinitz) は、ピラミッドに残された幾百もの落書き (graffiti) から古代社会へ迫る。上記風食が危ぶまれるものの、動植物や十字架、果ては近代アラビア文字に至るまでが建築石材表面に記されており、その飽くなき解釈学的可能性を示唆している。あえて優劣をつければ、最も際立っていたのはピラミッド造営法のメモ書きである。過去にも類例が見つかった (Hinkel 2000)。いずれもメロエ王国建築専門家 F. W. ヒンケルが生前記録したものだが、彼亡き今、当該分野を牽引しうる後継者が待ち望まれている。

4. 四日目

メロエ語のセッションがここで組まれた。当該分野の世

界的権威リリーは、近年インターネットオークションに出品されていた一点のシストラムへ注意を喚起する。取手に刻まれたメロエ文字は次のように訳出できるという。「アルネカマニの kala……タベテリト……をイシスへ捧げた」。まず留意すべきは、アルネカマニ (Arnekhamani) が紀元前 3 世紀中葉の支配者ということである。従来メロエ文字出現は紀元前 2 世紀初頭に据えられてきたが (Rilly 2010: 14)、本シストラムによりその年代が半世紀近く遡ることとなった。言語学的起源の一端がこうして暴かれたことで、メロエ王国の歴史像は今後一層鮮明になってゆくであろう。

ハロフ (J. Hallof) はカスル・イブリーム (Qasr Ibrim) 出土資料を検討した。修辞法へ収斂していったその発表によれば、新たに 62 葉の「魔除け・神託文書」が見つかったという。筆者は碑文学者としての素養を持ち合わせていないものの、メロエ語研究の驚異的進展を目の当たりにした次第である。なお、ブライヤー (F. Breyer) とアブダッラー (A. M. Abdalla) は会議不参加のため省略する。

休憩を挟み登壇したエドワーズ (D. N. Edwards) は「モノ作り」について思考を巡らせた。総じて理論的見解に終始したが、その真意はスーダン (南スーダン含む) をアフリカ史全体へ位置付けることにあったように思う。ともすれば我々は専門分野に閉じ込めがちであるが、かつてアダムス (W. Y. Adams) が「アフリカへの回廊 (Corridor to Africa)」と表現したように (Adams 1977)、本国はかねてより領域横断的交易網の結節点となっていたはずである。主要交易相手としてエジプトが挙げられるならば、エチオピアやチャド、エリトリアとの関わりは未知と言っても過言ではない。上記観点からスーダンの物質文化を相対化し、大局観を紡ぎ出してゆくことが求められている。

ハンフリス (J. Humphris) は鉄生産を扱った。メロエが「アフリカのパーミングム」と呼ばれることは周知のとおりだが、こうした紋切型表現はすでに過去のものと言って良い。実際、ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン・カートル校に在籍する彼女は、ドイツ考古学研究所支援のもと当該分野を刷新しつづけている。基礎的紹介は別に譲るが (Humphris and Rehren 2014)、特筆すべきは、メロエとハマダブの製鉄遺構群で放射性炭素年代が得られている点である。その数ゆうに 100 点を超え、鉄生産の実態が驚くべき精度で明らかになりつつある。動作連鎖 (chaîne opératoire) への目配りもまた手厚い。すなわちどのような鉱石・木材が燃料とされていたのかという問いである。当然ながらその本格的解明は今後を待たねばならないが、一つ一つの工程が詳らかにされており興味が尽きない。

5. 五日目

本日が最終日である。ミュンスター大学教授ローヴァッサー (A. Lohwasser) は、ジェベル・バルカルで発見された一つの石碑 (stela) を扱った。当碑文は長らくピアンキ (パイ) に帰せられてきたが、その修辭的表現を参照するかぎり別人物のものであった可能性が高いという。ならば誰なのか。王名が削り取られている以上特定困難だが、こうして石碑とピアンキの繋がりを、したがってクシュ王国初期イデオロギーの既存理解の一端を「脱構築」することが目指された。彼女が述べるように王名抹殺 (damnatio memoriae) と権力争いを結びつけることは魅力的だが、検討はまだ始まったばかりであり課題も多い。

続くドル (S. Doll) は第25王朝支配者タヌタマニ (Tanutamani) に関心を寄せた。とりわけ王墓壁面装飾を分析した彼女によれば、計算されたその空間配置は「再生装置 (regeneration machine)」として機能しているという。中でも独創的だったのは、壁面碑文にピラミッド・テキスト (第670章) が採用されているという指摘である。ただし、さらなる考察には王墓再調査が不可欠として無難に終始した。

クルツ・ウリベ (E. Cruz-Uribe) はやや異端と言えるかもしれない。実際、メロエ学者でなくエジプト学者とするのがふさわしい。それでもメインスピーカーとして招待されたのは、彼の最新出版物が目を見張るものだからである。フィラエ島 (Philae Island) に残る民衆文字 (Demotic) を集成・出版したのがグリフィス (F. Ll. Griffith) ならば (Griffith 1937)、クルツ・ウリベはこれを約80年ぶりに改訂したのみならず、実に534点もの新資料を追加している (Cruz-Uribe 2016)。そこには紀元後3世紀中葉の支配者テコリデアマニ (Tegorideamani) の献呈碑文も含まれており、メロエ王国とローマ帝政期エジプトの交流史理解を大きく前進させることに成功している。

発表自体はフィラエの歴史的な位置付けを巡るものであった。メロエ王家がここを訪れていたことは比較的良く知られるものの、その目的がいかなるものだったかは必ずしも鮮明でない。ローマ帝政期エジプトとの和平交渉をまず挙げることができるが、クルツ・ウリベによれば、上述民衆文字はさらに別の目的をも示唆しているという。イシス神官への任用である。本主張がよって立つ言語学的根拠の説明は身に余るが、一例を挙げれば、これまで「使節団 (ambassador)」と訳されてきた特定単語を「神殿の長 (temple elder)」と読み替えることができるらしい。当文脈における称号保持者は明らかに神官であり、ここから、ヌビア人がフィラエ島のイシス神官として登用されていた可能性を読み取ることができるという。メロエ学者に対する問題提起となろう。続く発表は聴講できなかつたため省略する。

イエリン (J. Yellin) は「アバトンの神託」に焦点を当てた。ハドリアヌス門 (Hadrian's Gateway) に刻まれた当碑文によれば、フィラエの主神イシスは10日ごとにナイル川を横切り、対岸へ渡り、オシリスの亡骸を取り囲む365個の供物台へミルクを注ぐという (Junker 1913)。この神話的言説の広がりを把握すべく、とりわけミルク入れとして描かれた手桶型容器 (situla) が検討された。どうやら容器は2つの図像学的伝統に分かれるらしい。タイプA (9例) をエジプト系、タイプB (5例) をヌビア系として整理する彼女によれば、その時間的／空間的分布を追いかけることで、「神託」がどのようにメロエ王国へ伝播し、受容され、発達したかが明らかになるという。目まぐるしく移り変わるスライドゆえ詳細を書き留めることは不可能だったが、現在彼女はメロエのピラミッド葬祭殿を再検討／書籍として出版準備中らしく注目される。

ドイツ考古学研究所のヴォルフ (P. Wolf) が最後を務めた。ハマダブでは2001年から神殿や住居跡などが発掘されているが、なかでも特筆すべきは放射性炭素年代測定を駆使したその遺跡編年である。古い順にC期 (紀元前2世紀中葉～前1世紀)、B期 (紀元前1世紀～紀元後3世紀)、A期 (紀元後3世紀～4世紀) となっている (Wolf and Nowotnick 2013)。これだけでも目覚ましい業績だが、とりわけ本発表では、ナイル川が時とともに流路を大きく変えていたこと、したがってその侵食作用も広範囲に及んでいたことが強調された。メロエ周辺域の宗教建造物はしばしば中洲に浮かんでいたとされるが (Bradley 1982: 167)、そのような仮説を限りなくありえないものとする結果という。ただしこれには少なからぬ反証が存在することを付け加えておく (実際、アル＝アッサのアメン神殿は中洲に浮かんでいたと考えられている)。

IV. 「メロエ土器研究の未来」：終わりにかけて

以上、極めて駆け足でメインセッションを概観してきた。これにサブセッションが加わるものの、先述したように全てを紹介することは字数の関係から難しくまた必要とも思わない。したがってとりわけ重要なもの一つを取り上げ結びとしたい。それは、会議三日目夕刻に催されたワークショップ「メロエ土器研究の未来 (原題 Workshop on Bayuda pottery)」である。

ロンドン大学東洋アフリカ研究学院 (School of Oriental and African Studies - SOAS) のフィリップス (J. Phillips) が司会を務めた本ワークショップは、他のセッションと異なり発言自由の討議形式で行われた。問いは一つ、メロエ土器をどのように理解すべきか。その背景には、各国土器専門家が異なる分類基準を採用してきたため相互比較が著しく困難になったという現実がある。いったい我々はどこ

へ向かっているのか。言い換えれば、エジプト考古学者が1980年に「ウィーンシステム (Vienna system)」を確立したように、スーダン考古学者も似たような土器分類体系を模索すべきかどうか話し合われた。結論として述べれば、2018年にパリで行われる第14回ヌビア学国際会議へ各自資料を持ち寄り、共通認識形成を図ることとなった。

ただし課題も多い。土器分類体系がようやく確立されつつあるならば、これは、各国調査隊の意思疎通がこれまで不十分だったことをも意味する。学術的閉塞感解消に向けた方策として、Academia.eduやDropboxなどのオンラインサービスを利用することの大切さが繰り返し強調された。また当ワークショップを契機として国際土器研究グループが形成される運びとなり、今後もオンライン上で議論／情報交換を継続してゆくこととなった。

短期間であったが、第12回メロエ学国際会議を通じてこのように数え切れない新知見と共同研究が芽生えた。今回は2020年にハルツーム大学もしくはミュンスター大学で催されるとのことである。ただし、その詳細がまだ定まっていない現状、雑多なことをこれ以上書き連ねることは控えひとまず筆を擱くことにしよう。なお、本稿執筆にあたっては公益財団法人高梨学術奨励基金の助成を受けた旨明記しておく。

註

- 1) 学会プログラムは次を参照：<http://www.nm.cz/admin/files/NPM/download/preliminaryprogram.pdf>。(2016年10月7日閲覧)

参考文献

- Adams, W. Y. 1977 *Nubia: Corridor to Africa*. London, Allen Lane.
- Anderson, J. R. and Salah eldin Mohamed Ahmed 2009 What Are These Doing Here Above the Fifth Cataract?! Napatian Royal Statues at Dangeil. *Sudan & Nubia* 13: 78-86.
- Berenguer Soto, F. 2001 *En busca de los faraones negros: Misión de la Fundación Arqueológica Clos en Sudán*. Barcelona, Fundación Arqueológica Clos.
- Bradley, R. 1982 Varia from the City of Meroe. In N. B. Millet and A. L. Kelley (eds.), *Meroitic Studies: Proceedings of the Third International Meroitic Conference Toronto 1977*, 163-170. Berlin, Akademie-Verlag.
- Cruz-Uribe, E. 2016 *The Demotic Graffiti from the Temple of Isis of Philae Island*. Atlanta, Lockwood Press.
- Eide, T., T. Hägg, R. H. Pierce and L. Török 1998 *Fontes Historiae Nubiorum: Textual Sources for the History of the Middle Nile Region between the Eighth Century BC and the Sixth Century AD III. From the First to the Sixth Century AD*. Bergen, University of Bergen.
- Gamer-Wallert, I. 1983 *Der Löwentempel von Naq'a in der Butana (Sudan) III: Die Wandreliefs 1. Text - 2. Tafeln*. Wiesbaden, Dr. Ludwig Reichert Verlag.
- Garstang, J., A. H. Sayce and F. Ll. Griffith 1911 *Meroë: The City of the Ethiopians. Being an Account of a First Season's Excavations on the Site, 1909-1910*. Oxford, Clarendon Press.
- Griffith, F. Ll. 1937 *Catalogue of the Demotic Graffiti of the Dodecaschoenus*. Oxford, Oxford University Press.
- Hinkel, F. W. 2000 The Royal Pyramids of Meroe: Architecture, Construction and Reconstruction of a Sacred Landscape. *Sudan & Nubia* 4: 11-26.
- Hintze, F. (ed.) 1973 *Sudan in Altertum: I. Internationale Tagung für meroitistische Forschungen in Berlin 1971*. Berlin, Akademie-Verlag.
- Humphris, J. and T. Rehren 2014 Iron Production and the Kingdom of Kush: An Introduction to UCL Qatar's Research in Sudan. In A. Lohwasser and P. Wolf (eds.), *Ein Forscherleben zwischen den Welten: Zum 80. Geburtstag von Steffen Wenig*, 177-190. Berlin, Sudanarchäologische Gesellschaft zu Berlin.
- Junker, H. 1913 *Das Götterdekret über das Abaton*. Vienna, Alfred Hölder.
- Kendall, T. 1999 The Origin of the Napatian State: El Kurru and the Evidence for the Royal Ancestors. In S. Wenig (ed.), *Studien zum antiken Sudan: Akten der 7. Internationalen Tagung für meroitistische Forschungen vom 14. bis 19. September 1992 in Gosen/bei Berlin*, 3-117. Wiesbaden, Harrassowitz.
- Kröper, K., S. Schoske and D. Wildung 2011 *Königsstadt Naga/Naga Royal City: Grabungen in der Wüste des Sudan/Excavations in the Desert of the Sudan*. Munich-Berlin, Staatliches Museum Ägyptischer Kunst.
- Macadam, M. F. L. 1949 *The Temples of Kawa I: The Inscriptions*. London, Oxford University Press.
- Macadam, M. F. L. 1955 *The Temples of Kawa II: History and Archaeology of the Site*. London, Oxford University Press.
- Onderka, P. and V. Vrtal (eds.) 2013 *Wad Ben Naga 1821-2013*. Prague, Národní Muzeum.
- Onderka, P. and V. Vrtal 2014 *Nubie: Země na křižovatce kultur/Nubia: A Land on the Crossroads of Cultures. Wad Ben Naga 2014*. Prague, Národní Muzeum.
- Rilly, C. 2007 *La langue du royaume de Méroé: Un panorama de la plus ancienne culture écrite d'Afrique subsaharienne*. Paris, Champion.
- Rilly, C. 2010 *Le méroïtique et sa famille linguistique*. Leuven-Paris, Peeters.
- Sakamoto, T. 2016 Soba and the Meroitic Southern Frontier. *Der Antike Sudan: Mitteilungen der sudanarchäologischen Gesellschaft zu Berlin e. V.* 27: 125-132.
- Smith, S. T. and M. R. Buzon 2014 Colonial Entanglements: "Egyptianization" in Egypt's Nubian Empire and the Nubian Dynasty. In J. R. Anderson and D. A. Welsby (eds.), *The Fourth Cataract and Beyond: Proceedings of the 12th International Conference for Nubian Studies*, 431-442. Leuven-Paris-Walpole, Peeters.
- Török, L. 1999 The Origin of the Napatian State: The Long Chronology of the El Kurru Cemetery. In S. Wenig (ed.), *Studien zum antiken Sudan: Akten der 7. Internationalen Tagung für meroitistische Forschungen vom 14. bis 19. September 1992 in Gosen/bei Berlin*, 149-159. Wiesbaden, Harrassowitz.
- Vercoutter, J. 1962 Un Palais des "Candaces" contemporain d'Auguste (Fouilles à Wad-ban-Naga 1958-1960). *Syria* 39: 263-299.
- Vincentelli, I. 2006 *Hillat El-Arab: The Joint Sudanese-Italian Expedition in the Napatian Region, Sudan*. Oxford, Archaeopress.
- Wolf, P. and U. Nowotnick 2013 Hamadab - eine urbane Siedlung im Mittleren Niltal. In S. Wenig and K. Zibelius-Chen (eds.), *Die Kulturen Nubiens - ein afrikanisches Vermächtnis*, 429-451. Dettelbach, J. H. Röhl.
- Zibelius, K. 1983 *Der Löwentempel von Naq'a in der Butana (Sudan) IV: Die Inschriften*. Wiesbaden, Dr. Ludwig Reichert Verlag.
- 坂本 翼 (投稿中)「スーダン考古学研究のための覚書」。

坂本 翼
リール第三大学エジプト学研究所
Tsubasa SAKAMOTO
Institute of Papyrology and Egyptology,
University of Lille 3